

第3回江別市行政審議会 第1部会 会議録（要点筆記）

日 時：平成25年4月17日（水） 18:00～20:30

場 所：野幌公民館 研修室5号

出席委員：押谷委員、佐藤委員、阿部委員、白鳥委員、岸本委員（計5名）

事務局：鈴木企画政策部長、米倉企画政策部次長、千葉課長（政策調整課）、西田参事（総合計画担当）、村田主査（総合計画担当）、長谷川主任（総合計画担当）

■開会（押谷部会長）

本日の進め方についてですが、まず第2回全体会議で議論したことについて、感想やご意見、ご質問などをいただきたいと思います。そしてこの部会が担当する戦略は「とものつくる協働のまちづくり」ということで、他の部会と色々重なる部分があると思いますので、その辺りのことについてご意見をいただきたいと思います。その上で、「とものつくる協働のまちづくり」の3つの柱立てについて、この柱立てで良いのか、柱立ての中身の小項目がこれで良いのかといったことについてご意見をいただいて、この第1部会としての柱立ての案をまとめたいと思います。そしてその結果を第4回の全体会議に諮りたいと思います。

■議事

（1）えべつ未来戦略の柱立てについて

<前回の議論についての感想・質問・意見等について>

○ 佐藤委員

えべつ未来市民会議でも議論になった、この部会のテーマでもある協働の仕組みをどうやってつくるのか、どうしたら人づくりができるのか、まちづくりができるのだろうかということ、この場ではっきりと形にしていきたいと思っています。また、情報の発信・収集の仕方といったことも含めて、今後江別はどのように展開するのかということも併せて意見をまとめていきたいと思っています。

○ 岸本委員

えべつ未来市民会議から具体の細かい意見が上がってきて、それをまとめたものをまたもう一回掘り下げるような印象を受けています。えべつ未来市民会議の中で詰め切れなかった部分、ぼんやりと浮かんだ形を具体的にしていくのがこれからの作業だと考えています。

○ 押谷部会長

えべつ未来市民会議で議論されたものを、どのように反映していったら良いのかという点について、何かご意見ありますでしょうか。ちなみに岸本委員はえべつ未来市民会議ではどちらの部会でしたか。

○ 岸本委員

協働を所管していた高齢化・市民活動部会でした。ですので、今回担当する協働の戦略は、えべつ未来市民会議ですと議論してきた部分です。

○ 押谷部会長

それでは、事務局がまとめた骨子（たたき台）の中に、この要素が入っていないのではないか、といった部分があればご指摘いただきたいと思います。

○ 岸本委員

上手くまとめていただいていると思います。

○ 白鳥委員

まとめ方として、めざすまちの姿という大枠的なものの他に、何に力を入れていくかという戦略ビジョンをつくっていくのはとても良いことだと思います。佐藤委員もおっしゃいましたが、その戦略ビジョンは、ある意味具体的な分かり易い方向でなければなりませんし、結果的にはそれが市民全員の手で、目的としてはゴールに近づくようなものでなければなりません。それをどのようにこの新しい総合計画の中に盛り込んでいくのかという部分を併せて考えていくのが使命だと考えていますが、そうではなくて、材料だけ提供して、あとのまとめ方は行政の方へお願いして、それをまた我々が見てまとめ方が良いとか悪いという審議をするということなのではないでしょうか。審議会の委員の方々が迷ったのは、その部分だと思います。ですから、このワーキングの場で、まとめ方、表現の仕方のストライクゾーンまで決めていくのか、あるいはパーツを決めていって、あとは行政の方に並べ方であるとか表現の仕方の整理を一旦お願いして、またさらにそれを我々が審議して変更していくというやり方なのではないでしょうか。そのやり方によって、今日の会議の進め方がかなり違ってくると思います。

○ 阿部委員

協働のまちづくりについては、その方向でいきたいということ、自治会の中で常に強調していることです。特に、地域づくり、地域の力をどういう形でこれから活かしていくかということが重要です。正直に言って、自治会の中でも、かなりの方がまだ行政に依存していることが多いので、自治会の先頭に立ってやっていて一番難しいところです。地域には、高齢者も含めて経験豊富な人や知識の豊富な人もいます。その人たちの力を活かす方法をこういう場で考えて何かの形で進めていきたいと思います。自治会も色々と問題を抱えていますので、大学へ相談に行ったりしており、今後自治会とどのように付き合っていくかという具体的なことも相談していますので、そういうことを活かしながら、みなさんのご意見をいただきながら議論していきたいと思います。

○ 押谷部会長

みなさん問題意識としては同じだと思います。

各委員から一言ずつご発言いただきましたので、白鳥委員からご質問があった、非常に重要なポイントについてどうするか考えたいと思います。議論の進め方について、白鳥委員から2つの選択肢をご提示いただきました。事務局で骨子（たたき台）としてあ

る程度まとめたものを出していただいておりますが、あまりそれに拘泥する必要はないのではないかと思います。白鳥委員は今まで色々なご経験をされていると思いますので、どういう方向が良いと思われるか、端的にご意見いただけますでしょうか。

○ 白鳥委員

せっかく部会に分かれて議論をするのであれば、表現の仕方まで部会で責任を負うような形をとるのが一番良いと思いますが、忙しい方々ばかりなので、まず我々が骨子のポイントだけ述べさせていただき、それを次回の全体会議に出すことにして、他の部会とのバランスなどもあると思いますので、それをもう一度この部会の中で議論していくのが良いと思います。その時には、ある意味、ここの文言はとても大事だから、この部会としてはこれだけは譲れないということがあるかもしれませんし、構成上はこうしてもらいましょうということがあるかもしれません。できればこの部会の中で責任をとれるように言葉遣いまで全部含めて議論するのが一番良いと思いますが、時間的にそれは無理かと思っておりますので、まず今日はポイントとなるストライクゾーンをどこにするのかを決めて、次にそれが素案として文章となって出てくると思っておりますので、その文章をどう整理するのかという議論を2回目以降の部会でやっていくのが良いと思います。

○ 押谷部会長

今日の段階では、どこに焦点を絞るのかという議論をして、それを全体会議で他の部会との整合性を確認し、そしてそれをまた部会で議論していく中で、この部会として譲れない部分などを確認していくという進め方が良いのではないかとご意見ですが、みなさんいかがでしょうか。

⇒全委員了承

それでは今日は基本的にこの部会でどのような議論をするかということについて焦点を絞っていくということで、細かな点についてはあまり議論しないことにします。

この部会の戦略は協働というキーワードが入っているため、他の部会と大いに密接に関係する部分がありますので、その辺をどうするかについてもご意見をいただきたいと思っております。

○ 白鳥委員

部会の開催はこの第1部会が最後とのことでしたので、他の部会で協働についてどのような扱いをしたのか確認した方が、手戻りがないと思います。

○ 押谷部会長

事務局の方から他の部会での協働についての議論状況を、掻い摘んでご紹介をお願いします。

(事務局説明)

どちらの部会でも、協働というキーワードが必要という議論があったようです。もう少し各戦略の議論が進む中で、また他の部会との関係性を確認していくことにして、具体的な議論に入りたいと思います。

<戦略「ともにつくる協働のまちづくり」の柱立てについて>

○ 押谷部会長

えべつ未来市民会議からの提言を踏まえて、事務局が「ともにつくる協働のまちづくり」という戦略について3本の柱立てにまとめています。これについて、まずこの3本の柱立てで良いのかどうかについてご意見をいただきたいと思います。

○ 白鳥委員

「○ 4大学が活躍するまちづくり」として「大学」を切り出したことには、重要な意図がありそうな気がしますが、どのような意図なのでしょう。

○ 押谷部会長

この人口規模で4つの大学と1つの短期大学がある街は、他にはないだろうということで、大学の関係者がえべつ未来市民会議の中で取りまとめ役になったような形です。

○ 佐藤委員

地域の力になるものを上手く活用しようということです。それが、学生であったり、そこで働く職員であったり、あるいは施設など、ハードからソフトまで色々なものを活用しようということです。右肩上がり時代ではありませんので、こういう特色を前面に出していこうということでした。特に、私立大学は厳しい財政状況で、大学も倒産する時代です。そうすると、この街から学生が少なくなってしまう、さらにシャッターの下りた街になっていってしまいます。そうならないように、学生が元気にこの地域で活躍できる、ということも含めて、「○ 4大学が活躍するまちづくり」という柱になっています。大麻は、全道的にも高齢化率が高いわけですが、色々と活躍されている高齢者の方々と一緒に、若い人が活動していけるまちをイメージしています。

○ 押谷部会長

前回の全体会議でも白鳥委員から大学の協働に対する姿勢についてご意見をいただきましたが、柱として大学のことを切り出したことについて、何かご意見ありますか。

○ 白鳥委員

4大学が協働のまちづくりをする上で非常に重要な役割を持つため、4大学を少し浮かび上がらせた構成にした方が良いと判断したということでしょうか。

○ 押谷部会長

そのように考えてこのような柱立てになっていますが、それが良いのかどうかご意見をいただければと思います。

○ 白鳥委員

並べ方だけ言いますと、「システムづくり」、「大学」、「高齢者」となっています。この並べ方の基準が分かりません。全体のコンセプトがあって、こういう柱立てをしましたというのが、一番説得力があって良いと思いますが、ここでのコンセプトは何でしょうか。協働と言ってしまうとそれまでですが、NGワードではないのですが、もう少し別な言い方がある気がしますし、別なパーツの組み替え方がある気がします。

○ 押谷部会長

全体として「ともにつくる協働のまちづくり」というトピックスに対して、どういうキーワードなのか、そしてそこからどのように3つなり4つなりの柱に分かれていくのが不明瞭ではないかというご意見かと思えます。システムづくりの中に果たす役割として、大学があり、高齢者がありという視点だと思えますが、たとえば、阿部委員から自治会の方でも協働のまちづくりや地域力が必要だというお話がありましたが、この枠組みの中に地域づくりということは入れられるでしょうか。阿部委員はどう思われますか。

○ 阿部委員

それぞれの項目の中で、具体的に議論していくうちに柱ごとの関連性が見えてくると思えますので、まずは3つぐらいに絞り込んで具体の中身に入っていくと、地域力の問題などにつながることも出てくると思えます。

○ 押谷部会長

白鳥委員のご懸念は、たとえば市民によるまちづくりというものも一つの柱になり得ますので、そういったものがこの柱立ての中に必要ではないかということかと思えます。

○ 白鳥委員

もう一つ、戦略的な部分ですので、強烈なものを出していこうという意図があるべきだと思います。たとえば、10本項目があるけれども、今回の総合計画の戦略ではその中の3本の部分にスポットを当てることにしたというように、その10本がどこか前段に忍ばれていて、特にその中から「システムづくり」と「大学」と「高齢者」を切り出した、という流れであるなら分かります。これらの言葉は絶対に必要なことですので、NGワードではないのですが、なぜこういう切り出し方をしたのかが分かりません。

○ 岸本委員

えべつ未来市民会議では、それと逆の手法というか、細かなパーツがたくさんあって、その中から分類しながらまとめていった経緯があります。一番最初に「システムづくり」が出てきたのは、色々と議論していると結局ここに行き着いたという経緯があります。自治会、サークル、大学や高齢者の団体などが様々な活動をしてはいますが、それらを網羅するような新しい形が必要ではないかという話が出てきたので、この柱が最初にあるという形になっています。

○ 白鳥委員

議論した結果、ある意味、キャッチフレーズ的なものとして出てきた表現だということでしょうか。

○ 佐藤委員

一番上の柱に書いてあるシステムに色々なものを投げていけば、色々な人たちが集まって議論がなされ、新しい展開が出てくるのではないかということです。そこに、市民や行政、議会の方が一緒に平等に参加して議論をして、次々と色々な展開を加えていきます。補助金を出してみたり、取ってきたりなど、色々なノウハウが出てきて、新しい取り組みが展開されていく、というようなもので、最終的にそこに全部集まってきました。それが結論ではなくて、そこからまた新しいものが出てくるというものです。

○ 白鳥委員

一つにするというのは個人的にはあまり好きではありません。多様なまちづくりがあります。多様な市民が、多様に連携し合って、協働し合ってまちづくりをするわけですから、協働の形がたくさんあるのに、総合計画というすごい大きなものの中で、1つに絞って良いのでしょうか。色々な形があって、その中から抜いてきたものがこれだという論旨の展開にしないと、市民も議会も動いていけないと思います。その論旨の展開をどういう形で作るのかということをお先ほど伺いました。「・恒久的な新しい協働の組織の設立」というのは、私から見ると一つです。もっと違う協働の仕方もあるのではないのでしょうか。その協働の仕方を市は推奨するということだと思いますが、この1点に絞るとするのは、戦略的なビジョンでこの部分を声高らかに言わなければならないというときにはとても良く分かります。ですが、もう一つ我々がしなければならないのは、協働なら協働の進め方でどういう進め方がある、その進め方について推奨しましょうというのがまずあって、その中で戦略ビジョンとしてはこういったものを今回の総合計画の中に位置づけていきたいと思いますというのが、一番良いような気がしますでしょうか。

○ 岸本委員

えべつ未来市民会議でここまで辿り着いた時点ですと、色々な協働の活動を網羅するテーブルみたいなものが常にある、例えば、子育ての問題があったときに、テーブルから子育てに関連する市民団体であるとか、学校、その地域の自治会など、それに関する人たちが、一つのプロジェクトのような形でいつでもその問題を話し合えるとか、あるいは、バス路線の問題では、バス会社、地域の自治会、病院など、関連する人たちが集まって問題を解決するような、柔軟性のある組織を考えています。その組織に常にみんなが集まって活動するというのではなくて、一つの場があって、何か問題があったときに関連する人がパッと集まって取り組むという組織をイメージしていました。

○ 白鳥委員

12万人の市民うち、実質的に活動できる人口としても7~8万人の人口規模を持っていて、この組織の中でしか協働ができないということではないと思います。これは一種のプラットフォームで、こういうプラットフォームがいくつもあって、いくつもあるプラットフォームの間で連携するというのが理想だと思います。そうすると、こういう組織を複数つくるとか、そこまで具体的に考えているのであれば分かります。恒久的な組織をつくりましょう、と言われても、一つしかないのかという話になります。そうではなくて、多様な人たちが集まるプラットフォームみたいな組織をつくりましょうと、そして、このプラットフォームになる組織はいくつあっても良いと私は思っていて、そのいくつもある中に、学校や専門家なども含めて、その中で関わりながら協働のまちづくり活動や事業ができていくというイメージではないのでしょうか。

○ 岸本委員

いくつものプラットフォームがあって、それらを網羅する形を一つつくっておこうと

いう考えです。

○ 白鳥委員

網羅というのは、どういうことですか。

○ 岸本委員

その網羅した組織が、何かをつくり出したり、解決したりということではなくて、プラットフォームがいつでもそれぞれの活動をできる、というような形をつくっておこうということなのです。

○ 押谷部会長

大きく違いはないと思うのですが、たとえば白鳥委員の出身母体であるNPO法人のえべつ協働ねっとわーくも、江別の中で協働を進めていくために様々なこと扱っている一つの組織だと思しますので、えべつ協働ねっとわーくの位置付けやどのような活動をしているかなどをお聞かせいただけますか。

○ 白鳥委員

平成16年頃に、江別市で「協働のまちづくり」という言葉が出てきて、施策の一つになりました。その時に、市民活動を行っている方たちが協働のキーマンになるだろうということで、そのキーマンを連携させるために、懇談会組織のような形で市が呼び掛けたところ、集まったのが50団体ぐらいありました。その人たちが、市民活動を論議していく中で、協働というのは絶対に必要だから、自分たちでネットワークを組みながら色々な事業をやっていければ良いですね、という話になりました。その時に、場が欲しいので、みんなで場をつくろうということになってできたのが、今の市民活動センターあいです。そしてそれを運営する時には、実行委員会方式でも良いですが、責任の所在を明らかにするために、それらを運営するNPOをつくった方が良いのではないかとということで、NPO法人えべつ協働ねっとわーくができました。運営している中で大きな柱は、まず一つは市民活動団体プラス自治会も含めた市民の交流です。2つ目は、協働を実践するための、活動をするための勉強の場であること、3つ目として人材育成をしていくことで、学校の先生や著名人を講師として招いて講座を実施したりしています。そういう活動の場にもう一つ必要なのが、情報の発信ということで、最近ではホームページなどを使いながら市民や市民活動団体へ情報を発信しています。ということで、最初のターゲットは市民活動団体でした。市民活動団体が、市民のために色々な活動をするをサポートしようというものでしたが、今はそれだけでなく、自治会の方や一般市民の方が相談に来られた時に、市民活動団体の人たちを紹介したり、呼んだりして、協働のマッチングを組み立てたりということをしています。

ここの柱立てにあるような組織が必要だというのは分かりますが、そういった組織は一つではないというのが私の理論です。そのような中間支援団体はたくさんあった方が良いのではないかと思います。その方が、より市民へ浸透すると思います。それで1つの組織という部分が気になりました。網羅するというのは、言葉を変えるとネットワークするというのでしょうか。

○ 岸本委員

市民活動団体に入っていない人たちもいますので、欲張りな言い方かもしれませんが、本当に全てを網羅した組織が1つあって、それでえべつ協働ねっとわーくのような組織がテーマごとにいくつもあるというイメージです。テーマによっていくつ組織あっても構わないと思います。例えば、4大学と市との間で協定がありますが、大学と商店街の間では何もありません。ただ特定の教授のゼミの学生に好意で参加してもらったり、祭りにボランティアとして参加してもらったりしている状態ですが、そういうつながり方ではなくて、正式にみんながきちんと協力し合おうということの一つの場で確認し合い、その上で、それぞれのテーマに関連した人たちが集まって対応していこうという考えです。

○ 白鳥委員

過去にそういうことがたくさん仕組みされましたが、結局はできませんでした。なぜかというと、人間の本性として、一つの決められた所には行きたくないという人がたくさんいるからです。だから逆に受け皿をたくさんつくってあげて、それをネットワーク化していくことを総合計画に謳ってあげる方が、より現実的だと思います。もっと強調しなければならないことは、そのような協働のまちづくりを進めましょうということだと思います。協働のまちづくりを進める上で、こういう機構もありますという順序だと思いますが、そういう協働の土壌をつくってこうということはどこかで表現するのでしょうか。

○ 押谷部会長

全体の中で、それぞれの活動が点になっていて、点の活動をある程度束ねていくことが必要であり、そのためにコアとなる場があった方が良いが、白鳥委員はそれが複数あっても良いのではないかというご意見かと思います。おそらく、えべつ未来市民会議の中で出てきたことも、どうしても中心になる一つの組織をつくるということではないと思います。えべつ協働ねっとわーくが、その役割を担っていただくならそれでも構いませんが、それだけではないということだと思います。

○ 白鳥委員

私は1つの組織では担いきれないと思っています。なぜなら、色々な目的やミッションを持った人たちがいますので、市民活動の目的がミッションの達成だとすると、そのミッションを合わせながら1つの組織でというのは無理があります。分からないわけではないのですが、ここの柱立ての冒頭で記述することに違和感があります。

○ 押谷部会長

阿部委員は、自治会で色々と抱えているまちづくりに関する問題点を解決するにあたって、どういう解決策が一番望ましいかと思いませんか。たとえば、他の自治会の事例を学ぶことも必要でしょうし、他の主体と連携を取るということも出てくるとは思いますが、協働というのはどういうイメージでしょうか。

○ 阿部委員

自分たちの中で問題点を浮かび上がらせて、その中で、これは自分たちで解決することができるのか、これはどうしても行政に相談しなければできない、というように分類をしながら進めていかなければ、地域の力だけでは簡単に解決できない問題がたくさんあります。他の自治会を参考とすることもしながら、時間はかかりますが、そういう進め方で取り組んでいます。

○ 押谷部会長

そういう時に、情報交換や他の事例を学ぶ場として、協働の組織が必要ということが出てきているのだと思います。表現方法の問題であって、みなさんのご意見に大きな違いはないと思います。表現をどうしたら良いでしょうか。この中に「・恒久的な新しい協働の組織の設立」とありますが、これは一つの目的になっています。前回の審議会でCOCの話が出ていましたが、これを一つの対象としているということだったと思いますが、これについて佐藤委員からご意見ありますか。

○ 佐藤委員

白鳥委員のおっしゃることもよく分かりますが、自治体、市民、企業、大学といった人たちが、ある程度組織としていつでも集まれて、今回はこういうことをやりたいが協力してくれる人がいないかと投げかけて、その中から仲間が出てきて、実際に実践してみようという起業展開を行って、そこに若者も関わっていくようなことを繰り返しやっていくものです。

○ 白鳥委員

佐藤委員と私の意見は、おそらくお互いにシンクロしていますが、私の経験から考えると、そういう組織は一つではないと思います。たとえば商工会議所に行かないと、江別市で商売ができないかというところではありません。柏市で「柏の葉国際キャンパスタウン構想」というものがあり、東大と千葉大が関わってセンターを設置しています。そういうものは、非常に良いので、つくることには大賛成です。ただ、それだけではないと思います。多様な人たちが協働する仕組みというのは一つではなくて、たくさんの仕組みを構築していくべきだと思います。構築していく中で、江別市は色々な形で支援をしていく、大学も色々な形で支援していこうということだと思います。先日、札幌学院大学の太田理事にお会いしたときに、当然これからは大学のまちづくりへの参加を大学を挙げてやっていきたいということをおっしゃっていましたので、そういうことは今後十分あり得る話です。そういうことも背景としながら、色々な多様な方々が取り組むという、その取り組み方こそ、江別市は戦略ビジョンとして挙げるべきで、この新しい組織の設立というのは一つのパーツに過ぎないけれども、その一つのパーツを今回は戦略的に支援していく、という論旨の展開であるならば、理解できます。

○ 押谷部会長

江戸時代の長屋では、何でも相談ごとや困りごとがあったときに、調整を請け負う大家さんなどがいました。そのような機能がまちづくりの中には必要だと思います。その時に、どういう主体が参加するかは別にして、仮にCOCのような組織があれば、出入

り自由で様々に参加できるのではないかというのが佐藤委員のご意見かと思えます。白鳥委員は網羅的な組織を一つ置くのではなくて、もっと多様に色々な組織があった方が良く、そのような散りばめられた点がいくつかまとまった集団が色々あって良いのではないかというご意見だと思えます。その辺りで少し食い違いがあります。

○ 白鳥委員

総論としてはネットワークしましょうということで、そのネットワークする組織の一つがこの柱立ての新たな組織だということであれば分からないわけではありませんが、次に出てくる問題として、この組織に知恵とお金を集めて分散させていく、共同発信をしていくということでしょうか。

○ 佐藤委員

知恵や補助金等で引っ張ってきたお金が、参加される方々による実践として展開して、上手くいけば地元に戻元されていき、上手くいかないものも当然ありますので、それは止めるという判断になります。みんなで協働した中で、実践をした中で判断ができていくのではないかと思えます。

○ 白鳥委員

そういう組織をつくったときに、誰が運営して、運営するお金をどうするのでしょうか。たとえば、それは4大学が分担しながら、その組織の中にお金を入れて、学校のサテライトスタジオとしてその組織を使うというようなことであれば、組織をつくるというのも分からないわけではないですが、いつもネックになるのは、組織運営としての課題です。そういうことを度外視して、この組織の設立のことに納得するとしたら、多様な協働をつくっていきましょうというのがまず第一点にあるべきで、その多様な協働の一つのやり方として、このような組織をつくって、そこから大学の知恵などを借りながら発信していきましょうという展開です。多様な市民が協働するまちをつくっていく、ということであれば、分からないわけではありません。

○ 押谷部会長

多様な協働をつくるとして、多様な協働には色々な仕組みがあって流動的で、タスクフォース的にその場その場でつくっていくということだと思います。ただ、多様な協働というのは、現れては消えていくということになると思いますので、それでは、恒久的なものにならないので、それをネットワークとして結びつけるようなコアになるような機能、あるいは組織が必要だということだと思います。

○ 白鳥委員

そういう組織だと私のイメージとは異なります。あくまでもその組織が一つのパーツであれば全然問題ないのですが、その組織が全体のプラットフォームとしての組織であるというのは、言うのは簡単ですが、現実的にどのようにつくっていくのか全くイメージできません。これは江別市の総合計画ですから、江別市はそこまで覚悟するということですか。組織ができたときに、市は信頼的な支援なのか、人的な支援なのか経済的な支援なのかわかりませんが、とにかく支援しますということでしょうか。その一方で、

多様な協働も推奨していきます、という言い方も無いわけではないと思いますが。今回、戦略ということで先駆的なことを明らかに掲げて、これを基に江別市も市民も協働していきましょうということですので、この恒久的な組織をつくりましょうというのを戦略として出すのは、それはそれで良いと思います。ですが、そこにはこの組織だけではないという表現が必要です。

○ 押谷部会長

組織のあり方だと思います。その組織を、全体をまとめていくような組織にするというから白鳥委員の琴線に触れているのだと思います。

○ 岸本委員

私のイメージとしては、とてもゆるい組織です。この組織に参加している人たちが、一つ事に一緒になってやるというものではありません。色々な人が入った中で、何かの時に、その中からいくつかの団体がこれをやりましょうという形で連携するものです。ですから、組織そのものにお金がかかって何かをするというイメージではありません。事務局的なものは行政がやらなければいけないかもしれませんが、その中では行政も同列で、場合によっては議員の方も入ってきて一緒に取り組むというような関わり方です。

○ 白鳥委員

シンプルに具体的に言うと、連絡会的なものでしょうか。その連絡会の中に情報が常に回っていて、情報をもとにそこに参加している人たちが連携して取り組むという形かと思います。ただ、そこからが問題で、取り組むためには世話役がいるとか組織が必要だということになってきます。では、その世話役なり組織をどのように食べさせていくのかということが次の問題になります。そこはなんとか各自で上手くやってくださいということでしょうか。

○ 岸本委員

正直、そういったお金のことまでは考えていません。白鳥委員のように実践している方たちには必要ないのかも知れませんが、問題意識があっても誰の知恵を借りれば良いかわからない人たちがいます。それを知らない人が、誰の知恵を借りたら良いかということになります。

○ 白鳥委員

岸本委員のご意見には大賛成です。ですが、最終的に組織となると、運営しなければならなくなります。それをたとえば商工会議所的なものに預けて上手くいけば良いですが、たぶん無理だと思いますので、それならば運営するための新しい組織をつくらなければならなくなり、世話役が絶対に必要になります。たとえば、どこに相談したら良いかとなったときに、ここのNPOが受けてくれます、と紹介するとします。2～3件のうちはニコニコしてやっていけますが、それが1年間に100件以上になったらすると、一人ぐらい世話役の人件費がほしいということになります。そうすると、誰がその世話役の人件費を負担するのかという問題になってきますので、そういった組織をつくらしたら、よほど江別市が強い決意を持って、政策としてつくっていくような腹づもりが

ないと実現しないと思います。審議会の委員の立場として、実現性よりもあるべき論を優先し、実現については市に考えてもらおうと割り切ってしまうと、ありなのかもしれませんが。

○ 押谷部会長

そこは合理的であるべきだと思います。総合計画なので、夢だけ語るわけにはいきません。５年後、１０年後の現実性を持たせるべきだと思います。具体的な経費の計算までは必要ないと思いますが、ある程度の具体的に実現できるような計画にする責任があると思います。その辺りを白鳥委員は懸念されているのだと思います。

○ 白鳥委員

そういうことをやりたくて、これまで自分も活動してきましたので、論理としては大賛成です。ですから、このシステム・組織のことだけではなくて、色々な多様な協働があるということが一番最初に謳わなければならないことで、その中で今回特筆するものが、表現は別として岸本委員がおっしゃったような、ゆるいネットワークの中の組織というか連絡会の設立ということではないでしょうか。それを今回の総合計画の戦略の目玉にしていこうということです。それが、他の部会の戦略で意見が出ている、子育てや世代間交流といった問題に必ず役立つということだと思います。それを否定するわけではなく、あった方が良くと思います。

○ 押谷部会長

「○ 多様な主体が協働で取り組むためのシステムづくり」の中に３つの小さい柱がありますが、その最初に「・恒久的な新しい協働の組織の設立」が出てきますので、その前の段階に何か一つ項目を入れたら良いのではないかというご意見かと思います。どういう入れ方が良いでしょう。多様な協働があり得て、江別市の中には様々な問題点があって、それを解決するにあたっては、様々な協働のネットワーク・仕組みがあるのだということはどう表現したら良いでしょう。今までは、たとえば自治会単位で問題を解決しようとしていたものを、他の自治会や他の主体とも連携したり、協働したりすることで、より効果的な解決策を探ることができるだろうということだと思います。要するに、個別の案件を個別で解決するのではなくて、協働ありきだということをもまず認識するということだと思いますが、そういったことをどう表現したら良いでしょうか。

○ 岸本委員

別の戦略にある、子育て、環境対策、防災、駅中心の活性化というような個別のテーマを、協働のシステムをつくって解決していこうというイメージだと思います。一つ一つ色々なものがあるので、それならばやはりそれをまとめた組織が必要ではないかという話の流れでしたが、それが逆に最初に柱として出てしまった状態です。我々は議論経過を踏まえて見っていますが、そうでないと違和感があるのかもしれませんが。

○ 押谷部会長

流れとしては、個別の案件の調整機関があって、それをもっと大枠でカバーしていくような傘になる部分が必要だということでしたが、その傘の部分の冒頭に出ているので

異論が出てきているのだと思います。最初に一つ項目を入れるとすれば何でしょうか。

○ 白鳥委員

「○ 多様な主体が協働で取り組むためのシステムづくり」の表現を少し変えて、「○ 多様な主体が協働で取り組む環境づくり」と仮置きして、その中の一つに、多様な協働で取り組むものに関する支援というような項目を置いて、2つ目にこの協働の組織の設立の項目があると収まりが良いのではないのでしょうか。「システムづくり」となると駄目なので、そういう協働で取り組むための環境をつくっていきましょうという一番大きな柱があって、その一つの項目として新しい協働の組織の設立のことがあるという形が良いと思います。

○ 押谷部会長

その組織づくりの前段に入れる項目はどのような表現が良いのでしょうか。

○ 白鳥委員

「・多様な協働を育む○○」というのはどうでしょうか。それとも「・協働のシステムによるまちづくり」が最初に来て、次にそういう組織の設立があるという柱立てではどうでしょうか。「・協働のシステムによるまちづくり」というよりは、「協働のまちづくり」というようにシンプルにした方が良いかとも思います。

○ 押谷部会長

「システム」ということ自体も非常に漠然としています。組織であったり、目に見えない形のネットワークのことであったりもします。

○ 白鳥委員

「協働を育む取り組みの育成」という項目が一番最初に来て、それからこれらの項目がくると良いのではないのでしょうか。「・恒久的な新しい協働の組織の設立」という項目は、私は一番最後にした方が良いと思います。今まで議論したようなプラットフォームとしての新しい組織がやはり必要なのだということであれば、この項目があっても良いと思います。プラットフォームという言葉は一般的ではないので、総合計画の中で入れ込むのは妥当性がないと思いますが、やはり最初にくるのは「・協働のシステムによるまちづくり」といった項目だと思います。そして、組織のこともありますとなるのではないのでしょうか。

○ 岸本委員

「○ 多様な主体が協働で取り組むためのシステムづくり」を「○ 多様な組織が協働し合えるまちづくり」としてはどうでしょうか。

○ 白鳥委員

「○ 多様な組織が協働するまちづくり」の方が良いのではないのでしょうか。

○ 押谷部会長

では今のご意見を踏まえて、「○ 多様な主体が協働で取り組むためのシステムづくり」を「○ 多様な組織が協働するまちづくり」と表現を変えて一番大きな柱の一つとして、その中に、今ある3つの小さな柱のうち「・恒久的な新しい協働の組織の設立」を最後

に持っていき、一つ目に「・協働のまちづくり」、二つ目に「・協働のシステムによる人づくり」、三つ目に「・恒久的な新しい協働の組織の設立」という流れにしたいと思います。「多様な組織」という表現の部分で、白鳥委員がおっしゃる色々な組織があるということ表現できると思います。

組織を設立するという点については、若干議論のある所として残されていますが、それについてはいかがでしょうか。一つの提案としては項目を最後にするというご意見がありました。

○ 岸本委員

表現を変えた「○ 多様な組織が協働するまちづくり」という言葉の裏に、恒久的な新しい組織の設立のことが含まれていると理解すると良いのではないのでしょうか。

○ 白鳥委員

組織は「設立」と言わずに、「組織づくり」という能動態にした方が良いのではないのでしょうか。「まちづくり」、「人づくり」、「組織づくり」として、行動としてはこういうことを目標にするという表現にした方が良いのではないのでしょうか。

○ 岸本委員

「設立」だと確かにここだけ目標が具体的にになってしまいます。逆にそれだけ強い想いが入っていたということでもあります。

○ 白鳥委員

「システム」という言葉を別なものに置きかえられると良いのですが。「仕組み」はどうでしょうか。それと、「・恒久的な新しい協働の組織づくり」は、「・恒久的な新しい協働に取り組む組織づくり」の方が良いのではないのでしょうか。

○ 押谷部会長

えべつ未来市民会議の議論を踏まえるということを見ると、「・恒久的な新しい協働に取り組む組織づくり」ということにすれば、協働のための色々な組織があるということになりますし、その組織の中で何をやるかという、まちづくりであったり、人づくりであったりというコンテンツになってくると思いますので、この3つの項目の並び方はこのままにしておきたいと思います。そうすると、大きな柱が「○ 多様な組織が協働するまちづくり」となって、その中身の項目の一つは「・恒久的な新しい協働に取り組む組織づくり」であり、その組織の中で何をやるかという「・協働のシステムによるまちづくり」であり、「・協働のシステムによる人づくり」である、という項目の並び方はいかがでしょうか。

○ 佐藤委員

「設立」という言葉が消えると、霞んでいってしまうように感じますので、少し寂しい気がします。

○ 押谷部会長

現実性を持たせながら、かつ具体的なものということ表現するため、少し弱い表現になりますが「設立」という表現を「組織づくり」という表現にしたいと思います。ま

た次回の全体会議の中で、他の部会との調整もありますので、その場でまたご議論いただくということによろしいでしょうか。

○ 白鳥委員

組織づくりの項目の内容を、次の段階で素案として文章化した中に、可能であれば組織の設立という内容を入れても良いのではないかと思います。

○ 押谷部会長

これはあくまでも骨子ということで柱立ての段階ですから、それぞれ具体的な内容を記載していく中で、佐藤委員の想いも盛り込んでいくということにしたいと思います。

次の大きな柱が「○ 4大学が活躍するまちづくり」で、その次が「○ 元気な高齢者が活躍するまちづくり」になっていますが、これによろしいでしょうか。大学と高齢者だけで良いのか、たとえばもっと他の主体があるのではないかとか、あるいは1本化してしまうなど、ご意見をいただきたいと思います。高齢化社会を迎えていて、10年後には全人口に占める高齢者の人口の割合が40パーセントを越えるというような状況になっていますので、高齢者というのは非常に大きな課題であることは事実ですが、それを前面に出すことについてはいかがでしょうか。また、人口構成のデータを見ていただいても分かるように、江別市の中では18歳から22歳の人口が大きなウエイトを占めていますので、そういう意味では大学生が大きな役割を果たしていると思います。また、多様な大学があるということから柱の一つとして出てきています。

○ 白鳥委員

押谷部会長がおっしゃるとおり、4大学は他の市町村にはない江別の特色ですので、それを今回旗に掲げるということには大賛成です。その下の項目の「・大学の得意分野を活かした産業の活性化」、「・大学のポテンシャルを活かした教育・人材育成」、「・学生の力を活かしたまちづくり」も良いと思います。ただ、最後の項目の「・大学の行事への市民参加」という表現は、「・大学の市民参加」の方が良いと思います。

○ 押谷部会長

大学が受け身ではなくて、もっと色々なファンクションを持って積極的に地域に関わっていくべきというご意見かと思います。

○ 阿部委員

現実として、大学の行事に参加するよりも、自治会の行事に大学生が参加しています。子どもたちは大学の行事へ行っているかもしれませんが、大学の行事に参加するというよりは、逆に大学に参加してもらっている状態です。

○ 佐藤委員

逆に大学の行事へ市民が参加していないということから、えべつ未来市民会議で出された意見でした。自治会行事への学生参加は良くありますが、逆に大学の行事へ市民があまり参加していないという意見でしたのでこういう表現になっています。誤解を招くので表現を変えた方が良いかもしれません。

○ 押谷部会長

一方通行ではなくて、双方向の表現にした方が良いと思いますが、どのような表現が良いでしょうか。

○ 白鳥委員

キーワードは「参加」なのでしょうか。「交流」という表現もあります。

○ 岸本委員

「交流」だと少し堅いイメージがあります。「参加」だとちょっと出かけて行ってすぐに入れるようなイメージがあります。

○ 白鳥委員

「・市民及び大学行事への相互参加」というのはどうでしょうか。「参加の促進」でも良いと思います。

○ 阿部委員

「・大学と地域住民との交流」ではどうでしょうか。

○ 押谷部会長

「・大学及び地域の行事への相互参加」でいかがでしょうか。それと、小項目の4つのうち3つに「大学」という言葉が並んでいて、途中の1項目だけ「学生」となっていますので、3つ目と4つ目の項目の順番を入れ替えたいと思います。

3つ目の大きな柱について、「高齢者」を強調した形になっていますが、高齢者だけで良いのかという議論があるかと思います。

○ 阿部委員

子どものことについては、戦略3の「次世代に向けた住みよいえべつづくり」に入っていますので、この戦略に入れなくても良いのではないのでしょうか。

○ 白鳥委員

高齢者のことは他の戦略では出てこないのでしょうか。

○ 押谷部会長

戦略3の「次世代に向けた住みよいえべつづくり」に「・高齢者の居住環境の充実」と、「・4大学との連携による子どもから高齢者までの生涯学習の推進」という項目があります。この辺りは他の部会での議論も踏まえて、次回の全体会議の中で調整することにします。この部会では高齢者同士が協働で、あるいは高齢者以外の方々との協働ということになるとと思いますが、「高齢者」という枠組みにしてしまっても良いのでしょうか。

○ 岸本委員

えべつ未来市民会議では、「元気な高齢者」という部分がキーワードでした。福祉や医療についても色々とは話しましたが、これからの協働のまちづくりという視点では、たくさんいる「元気な」高齢者がまちづくりを進めていくための大きなパワーを持っているのではないかという議論がありました。

○ 白鳥委員

並びだけで言うと、大きな柱を「世代」として、小さな項目に高齢者とか子育て世代

などが入ってくると、幅広いまとめ方になります。

○ 押谷部会長

高齢者という柱になると、65歳以上の人ということで一つのグループを形成しますが、交流とすれば65歳以下の人たちとの交流という形になり、世代間の交流というイメージにつながっていくと思います。

○ 白鳥委員

たとえば、抽象論になりますが、「○ 生き生きとした世代間○○が育まれる」というような柱にして、その中に高齢者が活躍するまちづくりであったり、コミュニティビジネスであったり、そして、子育て世代のことも逆にここでキーワードとして入れておいた方が良いと思います。あとは他の戦略との調整で、たとえば子育てに関しては「次世代に向けた住みよいいべつづくり」の戦略で特化して打ち出すことにするのかどうかというところです。

○ 押谷部会長

そうすると、この柱では世代間の交流ということを前面に出した方が良いということでしょうか。

○ 岸本委員

えべつ未来市民会議でも、「若者から高齢者までのマンパワー」というキーワードが出ており、子育て世代を巻き込むような活動といった意見も出ていました。

○ 押谷部会長

この戦略では協働がキーワードですので、「世代間」ということを前提にした柱があっても良いのではないかというご意見かと思います。

○ 佐藤委員

えべつ未来市民会議の議論としては、高齢者と一口に言っても、中には元気な人もいる、という意見が強くありましたので、「元気な高齢者」という柱ができたのだと思います。

○ 押谷部会長

元気な高齢者の部分は柱の中身の項目で協調するというだけでも良いと思います。多世代での協働というようなことを大きな柱にするとして、どのような表現にしたら良いでしょうか。

○ 白鳥委員

たとえば「○ 多世代が元気に活躍するまちづくり」として、その柱の中にもともと大きな柱であった「・元気な高齢者が活躍するまちづくり」を入れて、その他の項目として「・高齢者によるコミュニティビジネスの創出」とか、「・資格や経験を活かして働ける場づくり」が入って、さらに子育て世代と高齢者など多世代間の交流というような要素の項目も入れても良いのではないのでしょうか。この柱は多世代での交流や協働をテーマにするのが良いと思います。「・元気な高齢者が活躍するまちづくり」というのは良い言葉なので、項目として残すと良いと思います。

○ 押谷部会長

白鳥委員のご意見をまとめますと、表現はまだ検討しなければなりません、「○ 多世代の協働によるまちづくり」を大きな柱として、その中の項目として「・元気な高齢者が活躍するまちづくり」、「・高齢者によるコミュニティビジネスの創出」、「・資格や経験を活かして働ける場づくり」などがあって、さらに「・子育て世代と高齢者の協働」というようなものを入れるということでしょうか。

○ 白鳥委員

そうしておいて、全体会議の中で他の戦略との重複などを調整しながら、柱立てや表現を整理すれば良いのではないのでしょうか。

それと「・高齢者によるコミュニティビジネスの創出」に言葉を加えて、「・高齢者の知恵と経験を活かしたコミュニティビジネスの創出」とした方が良いと思います。

○ 押谷部会長

まとめますと、「○ 多世代の協働によるまちづくり」を大きな柱として、その中の項目を「・元気な高齢者が活躍するまちづくり」、「・高齢者の知恵と経験を活かしたコミュニティビジネスの創出」、「・資格や経験を活かして働ける場づくり」、「・子育て世代と高齢者との協働」の4項目とすることになりましたが、よろしいでしょうか。

⇒全委員了承

○ 押谷部会長

3本の大きな柱については、これまでいただいたご意見をもとに修正させていただきますが、この「ともにつくる協働のまちづくり」という戦略の中で、何か他に大きな柱は必要でしょうか。

○ 白鳥委員

防災のことはタイミング的には協働と絡めるのに良いキーワードなのですが、別な戦略に入っているようですので、ここはこれで良いと思います。

○ 押谷部会長

この協働の戦略では基本的に市民を重点に考えている状態ですが、行政との関わりとといったことについてはいかがでしょうか。当然、市は市民の活動や思いをもとに動くと思いますが、行政との関わりとか、行政との協働のようなことは何か要素として入れておく必要はないでしょうか。

○ 白鳥委員

一つ目の柱の「多様な」には行政も含まれているので良いのではないのでしょうか。

○ 岸本委員

協働という言葉に対して、市民主体という意識が強すぎて、行政が遠慮しすぎている感じがします。まちづくりをフルタイムで考えているのは行政です。特に協働のまちづくりという部分では、黒子的な立ち位置を行政が意識し過ぎているような気がします。行政がまちづくりのノウハウを一番持っているはずですし、実際に何かをやる時には、行政が入ってアドバイスなどをしてもらえると、市民だけで考えるよりも早く進みます

ので、そういう意味で遠慮せずもっと実力を発揮してほしいと思います。

○ 押谷部会長

行政がやることは、法律なり、条例なり、様々な決められた規定の中でしか動けない部分が多いので、それを市民であれば自由にできることを示していきたいということだと思います。岸本委員のおっしゃることを盛り込むとしたら、どのように表現したら良いでしょうか。

○ 白鳥委員

それを入れるとしたら、やはり一つ目の柱のところで、具体的に「市民、自治会、市民団体、企業、4大学、江別市など」を「多様な」というところの前に書き出すとわかりやすくなるのかもしれませんが。個人的に言うと、市職員のまちづくりへの参加もどんどん進めるべきで、項目の一つとして記載したいくらいです。

○ 岸本委員

えべつ未来市民会議でも似たような意見は出ていました。

○ 阿部委員

協働のまちづくりですから、行政と市民が一体という意識がありますので、なぜ行政が入っていないのか、と思われてしまうかもしれません。

○ 佐藤委員

そのために、一つ目の柱を行政も市議会議員も含めて、みんなでやりましょうという内容にしています。

○ 押谷部会長

では、「○ 多様な組織が協働するまちづくり」の「多様な」の前に、「市民、自治会、市民団体、企業、4大学、江別市など」と具体的に入れることにします

⇒全委員了承

他にご意見ないようですので、これまでの議論を踏まえて事務局の方で柱立ての整理をお願いします。

<他の部会の戦略と関わる部分について>

○ 押谷部会長

いくつかの点で他の戦略との調整が必要な部分が出てきます。一つは「高齢者」ということについて、他の戦略でも出ている部分をどうするかです。「高齢者」と高齢者を含めた「多世代」の交流・協働ということで、この部会の協働の戦略では位置付けた、ということ強調しておきたいと思います。

○ 白鳥委員

「高齢者」の定義を総合計画のどこかで記載する予定でしょうか。65歳以上という認識で良いでしょうか。

○ 事務局

統計上も65歳以上を高齢者としていますので、その定義に従います。

○ 押谷部会長

全体としてまとめるときに、そのことは脚注をつけるなどして表現していただければ良いと思います。

他の戦略から逆にこの戦略にも入れるべき要素は何かあるでしょうか。たとえば先ほど白鳥委員から、防災でも協働が絡んでくるというご意見がありました。東日本大震災でも支え合うということがキーワードとして出ていました。

○ 白鳥委員

過去の阪神淡路大震災のときにも協働しながら人を助けたという記録が克明にありますので、そういう意味では協働によって、お互いに安全・安心なまちを築いていきましょうというスタンスは必要ではないかと思います。それを総合計画の中のどこで表現するのが良いかというのは考えなければなりません。

○ 押谷部会長

何でも協働に持ってくるということではないと思いますので、「次世代に向けた住みよいえつつづくり」の戦略の中の「○ 安心して暮らせるまちづくり」の中に、協働の要素を入れるということも考えられます。全体会議の中で「次世代に向けた住みよいえつつづくり」の戦略を担当する第3部会に申し送って、調整することにしたいと思います。

その他の点についても、他の部会に関わる部分は、この場で結論を出すことができませんので、次回の全体会議の中で他の部会にも見ていただき、ご意見をいただくという形にしたいと思います。

<戦略「えべつの魅力発信シティプロモート」の柱立てについて>

○ 押谷部会長

「えべつの魅力発信シティプロモート」の戦略の、「○ 情報収集・発信のシステムづくり」の柱と、「○ ニーズにあわせた効果的な情報発信」の柱の中の「・市民へのまちづくり情報の発信」の項目がこの部会の所管となっています。江別の魅力が十分に発信できていないのではないかというご意見があって、戦略となっています。

○ 白鳥委員

ここに唐突に「・情報図書館の充実」という項目が出ていますが、これは何でしょうか。

○ 押谷部会長

えべつ未来市民会議でご意見があった部分で、先ほどのCOCのことにも絡むのですが、何か活動の場や拠点を置いておく必要があるのではないかと、ということから、その拠点として情報図書館をもっと活用してはどうかというご意見でした。

○ 白鳥委員

情報図書館の利用率や情報図書館で何をやっているのか、情報図書館の活動として何が足りないのかというデータがないと判断できないと思います。

○ 押谷部会長

えべつ未来市民会議のときに提出したデータがあったかと思しますので、事務局の方から次回の全体会議で配布してください。それを私の方から補足させていただきます。

○ 白鳥委員

情報図書館の目的、利用状況、市がどのようにそれを達成しようと考えているのかという方針の3つをご提示いただいた上で議論して、それだけでは情報図書館の役割として足りないので、こういう付加価値をつけたらどうかという話になると思いますので、そこは議論に時間をかけた方が良いと思います。

○ 事務局

この項目が情報図書館に特化して記載されているのは、えべつ未来市民会議の暮らし・定住部会の議論の中で、「情報」という言葉を捉えての提言があったためですが、図書館をつくったときの経過からすると、情報を市民に発信する場ではなく、あくまでも教育委員会の施設という位置づけです。えべつ未来市民会議での説明が十分ではなかった部分で、実際の市政情報の発信は企画政策部の広報が担う部分ですので、これについては整理が必要だと考えています。本来の位置付けは、通常の市立図書館ですので、全体会議の場でも事務局から説明したいと考えています。情報図書館という名前ですので、江別市の情報をすべて管理しているものだと理解された結果だと思います。ただし、そういった機能も今後情報図書館に必要ではないか、というご意見としては受け止めています。

○ 押谷部会長

「えべつの魅力発信シティプロモート」の戦略については、全体会議の中で事務局からデータを出していただいて、そのあともう一度部会に戻ってきたときに議論するというところでよろしいでしょうか。今日のところは十分に議論できませんが、次回以降の部会で議論していきたいと思えます。

(2) えべつ未来づくりビジョンの内容について

○ 白鳥委員

5ページの市民協働の部分の表現について、前回の審議会で、お金がないから市民ニーズに対応できないと読めてしまうので表現を変えてほしいという意見を出しました。もちろん財政的な問題も要素としてありますので、財政的な問題もあり、かつ「市民活動をする側の方が得意分野を活かしながら」、とか「行政ではなかなか手が行き届かない細かい部分について協働を活用しながら」というような表現にした方が良いと思います。

○ 岸本委員

13ページの「福祉・保健・医療」の分野は、えべつ未来戦略の中ではどこに該当するのでしょうか。制度として固まっているので、戦略として取り上げるものがないということでしょうか。

○ 事務局

まちづくり政策にあるものを、すべてえべつ未来戦略に載せるというものではありません。まちづくり政策の体系の中には、市が取り組むすべての事業がぶら下がる形になりますので、制度に基づくものはすべて入ってきます。その中から、短期間で特化して集中して取り組む部分をまとめるのが、えべつ未来戦略の趣旨です。江別市独自に市の単費で新たな制度を実施するという場合は、戦略として打ち出すことになるかもしれませんが、国の制度などすでにある枠組みの中での取り組みについては、まちづくり政策の中で整理しています。

○ 押谷部会長

14ページに、現行の個別計画が記載されていますが、「福祉・保健・医療」の分野に関しては、何らかの形で盛り込まれている個別計画がすでにあります。

えべつ未来づくりビジョンについては、全体に渡る内容ですので、その他にも何かご意見がありましたら、次回の全体会議でご発言いただきたいと思います。

(3) その他

次回の第4回行政審議会（全体会議）の日程調整のため、各委員の都合確認
⇒ 5月15日（水）に決定

■閉会